

健康教育

☆ 「日本一の児童と校長の外国親善旅行」 —フランスとイタリーの視察—	2
☆ 「五福」を求めて	4
☆ 日本一健康優良学校へのあゆみ	6
☆ 緒方 龍というせいと	8
☆ 日本一健康優良児を担任して	9
☆ 龍が日本一になつて	10
☆ 健康優良児日本一、野口美佐子	11
☆ 美佐子を育てて	13
☆ 健康優良学校を育てたい	14

体力テスト風景(野口さんのジャンプ) 朝日新聞社提供





日本一健康優良学校校長・優良児と湯浅先生（左から二人目）

「日本一の児童と校長の 外国親善旅行」

—フランスとイタリアの視察—

「子ども大使」使節団長

日本学校保健会理事長

湯浅 謹 而

は し が き

日本一健康優良児えらびと日本一健康優良学校えらびの仕事始めて戦後20年目にあたる。学校えらびは児童えらびより2年遅れ18年目になる。このような仕事を科学的にそして実際に丹念な努力を重ねている国は世界にないようである。これはユネスコとWHOの最高顧問ターナー博士に関連してどうも確実であるらしい。

さて、今から6年前、アメリカに児童だけの使節団を派遣し始め、3年前からはフランスとイタリアに児童だけでなく校長2人とともに4人の、日本一の児童と校長を送るようになった。この表彰事業について当初より企画推進に当たってきた私は文部省を退いてようやく今年始めて、訪欧の実際にふれることができたのである。従って、今後いかに考えるべきか、帰国後まだ十分な結論を得ているとはいえないが「子供大使使節団」の派遣の意義を若干明かにして、全国諸学校の参考供したいと思うしだいである。

パリの街々にある土産ものを売の店々には、必ずといっていいほど日本の女性がいるのではないかと思われ、いかなる飛行機にも、日本女性のホステスがいると思われる今日である。いまさら児童や校長のヨーロッパいきに何の意味があるのかという人もあるのではないだろうか。私は以上のようなことをふみかまえて、以下のようなことをご報告したいと思う。

訪 欧 の 実 際

使節団という名にふさわしく、フランスやイタリア、パチカンへの公式訪問は、各政府や法王庁ならびに教育関係になされた。また日本大使館への訪問と大使からの御招待に接したわけである。いつのときにも緒方君と野口さんの2人の子ども大使は、十分に一千万日本全児童を代表するのにふさわしい風格と言動を示してくれた。私を中心に、前もって打合わせをしたのはもちろんであるが、堂々たる様子と思われず

卒直にふるまってくれてホットした思いであった。

訪問したパリやローマの小学校では、同じ年令の多い小学校6年のすべての児童はもとより、先生さえしの緒方君と野口さんのすぐれた体格やりっぱな様子に驚いていた。そして担任の先生が、みなさんと同じ年令の日本の子供の代表だと説明してくれるので、パリやローマの子どもたちは目をみはって迎えてくれた。野口さんは、パリの街や店で何回か「マダム」（奥さん）と呼ばれ「とんでもない、小学校の子どもで、12才になったばかりです」といったこともあった。日本人は大きくないと思っていた人がいたら、さぞびっくりしたにちがいないと思う。

しかし、からだの大きいだけでは何のじまんにもならない。2人の子どもたちが、フランスとイタリアで何を考え、どのようにふるまったかは、彼等がホテルの自分の部屋で眠る以外の時間は、いつも両側につれていて私にはすっかり把握できたのである。フランス語やイタリア語はもちろん英語も使えない2人ではあったが、緒方君などは、パリのスーパーマーケットにみかん買いにひとりでいってきてくれた。ちゃんとみかんを買ってきた彼の姿に、私はひとしれぬ感慨をもったのであった。一人っ子の野口さんも、ホテルの大きな部屋にたった一人でよく寝起きして弱音をはかなかった。ローマの日本文化会館での日伊の子ども交歓会では、2人とも折紙や矢立てを使つての写字などに懸命のサービスしてくれた。

子供大使の感想をめぐって

2人の子ども大使は、パリやローマで何を知ったのであろうか。彼等の驚いた最大のことが2つあった。それは、小学校1年生のときから落第があることと、学校や家庭での指導に厳しさのあることの2つであった。隊伍を整えてスキー学校へ向かう各学級の子どもと廊下ですれちがったり、幼稚園の子ども集団と会ったりしたが、がやがや、つついたりふざけたり、しゃべったりしているものが1人もいないのである。

また、2人が、パリやローマの街のこまごまとしたことについて注意し、しきりに祖国日本との比較に深く思いをいたしているのに感心した。おそらく、さまざまな点から、祖国とわが学校、わが家の再発見をしたにちがいないと思う。2人が、ローマで両親、兄弟などにささやかながら、力いっぱいのおみやげをと苦心しているのを見て、2人の中に日本の子どもの心のやさしさや思いやりをみて、ほろりとしたしだいである。また、以上のことにつれて、2人のすぐれた探究心のあることも知った。帰国の途中、北極圏に近づいてオーロラがみられ、緒方君などは飛行機の窓に長時間顔をくっつけて眠るのも忘れていた。

2人の6年生の児童の生の感想をきき、そして2人の小学校の校長から同じことがらについて感想をききながらヨーロッパの学校や街をみるのができたのは、私にとって幸であった。日本人のからだづくりや体力づくりがいわれているが、日本一の健康優良児に対しては、全くその必要はない。それだけでなく、長途のヨーロッパまわりを通して、その旅のはげしさにさえたえられることを知ったのである。私たちは、このように、日本一の健康優良児とそのえび方について、いささかの問題ももつ必要のないことを知った。そして、訪問の先々で、もっと広く世界の各地に親善訪問をしてはどうかとさえいわれた。

しかし、その2人の本人をして驚かしたことがらについては、深く考えてみたいと思う。1割以上の落第生のあることと、それをとりまく諸問題は別として、人間形成は家庭に、学力の向上は学校にといくらか分担がみられるようであるが、学校家庭に共通した指導の厳しさは徹底したもののように思われる。そして、この厳しい指導は何に向けられているのであろうか。パリの公立学校の廊下で児童たちとすれちがったときに感じたことであるが、「他人に迷惑をかけない」ということに向けられたもののあることだけはたしかである。パリの街には人身傷害の交通事故は全くみられないというほど少い。これなども人間尊重、生命尊重といえば一言ですむかもしれないが、やはり他人に迷惑をかけないという点に立っているのではないだろうか。エチケットも社交もマナーも、他人に迷惑をかけないの一点につきるようにも思えるのである。

このようなことについては、日本の家庭はもちろん、学校も健康教育や安全教育いや教育そのものを支えるバックボーンとして考えねばならないのではないだろうか。教育も育児も表面にあらわれてみえたり考えられるものだけでなく、その底を流れている最も強い厳しい何かを、国をあげて指導しなくてはならないのではあるまいか。多分、それは学習指導要領に書き出さないようなものではないであろうか。学校が家庭に向かって要求する人間形成について、私たちはもっと真

けんに責任を果すべきではないだろうか。このようなところが、戦後いまだ未解決のままになっておるために、学校教育の目標と矛盾する社会の事象がみられているのではないだろうか。

健康優良学校の意義

私たちは、ヨーロッパをまわって、学校と家庭が強く区分され、お互いに責任と義務を厳しく守っていることに感心した。これもおたがいに相手をさまたげないでよいとも思う。しかし、子供はその生活の全体を通して育ち成長発達する。学校と家庭とが緊密に連れいし、子どもが十分に自主自立の活動を展開しなければ成果はあがらない。従って、ヨーロッパの学校と家庭の今日の実態を守り、そのうに学校と家庭との組織的活動の場が一つあれば万全ではないかと思うのである。私たちが昭和26年以来、健康優良学校を推進してきたのも、実はそのところに狙いがある。学校と家庭が同一課題に立って連れい努力しようとするれば、それは国語、算数、理科などの教科内容においてではなく、前記のように生活の基底にあるものか、生活の実践にかかるものでなくてはなるまい。従って生活の実践目標として、健康や安全や生活の信条がとりあげられるということになる。私たちは、健康優良児育成の過程を重視しそれ自体に健康優良学校の名称をとり、それを推進してきた。健康優良学校えらびの仕方やその意義については、すでにヨーロッパに所在するユネスコから各国に配布された広汎な記述の中に収められ紹介されている。

ここに紹介した2人の健康優良児のような子どもを、計画的組織的に育成していこうとするとところに健康優良学校の意義があるのである。従って、健康優良学校は先生や父兄だけを組織活動の対象としているのではない。最も努力しているのは子どもに対する子ども自身の存在である。このようなことから、毎年、全国都道府県を代表する健康優良学校の児童代表によって構成される全国子ども会議をもっている。これは一般世間に知られないすばらしい存在である。一生を教職にささげてきた小学校長でさえこれを始めてみた人は感嘆しているのを見てもうなづけるのである。私は今回ヨーロッパの子どもたちに、日本の子ども国会ともいふべき存在を紹介するとともに、その全日本の子どもの会議の4人の議長団の2人が、今、君たちの目の前にいる緒方君と野口さんと伝えた。それはすばらしい。自分たちの国にはそんなものはない。という話をきいて、もし、君たちが日本にくるんだったら、そのときにこないか。私たちは、君たちをゲストとして迎え、大いに意見をきくだろうと話して拍手をうけたり謝意を表わされたりした。

学校教育の内容について、いろいろたくさんの感想をもっているが、紙面に限りがあるので他日に譲ることにしよう。



「五 福」を 求 め て

熊本市立五福小学校長

渡 辺 恵

1. わらべ唄

そこばくの塵あくたを浮べて静かに流れていく坪井川——かつて熊本城の外濠の役を果たした面影はなく、春先きの柳の芽を映したり秋の梧桐の落葉を浮べたりしていく古町の名残りとどめる川——それにかかる洗馬橋。

あんたがた どこさ

肥後さ

肥後 どこさ

洗馬さ

洗馬川には エビさが・おってさ

……

こんなわらべ唄のえにしにつながる坪井川と白川の合流する三角洲の上に私の校区はある。全くの城下町で、明治10年の西南役には、学校を始め校区ほとんど灰燼に帰したが、こんどの戦災からは脱れて、90年の街区と風土に若干の改装は加えられても、昔ながらの御間屋風の街並みが、斜陽の薄い影と老舗の貫禄を交錯させながら、新しい時代への脱皮を構想して、20世紀の終末を清算しようと懸命な努力を続けている。

わらべ唄でお正月の毬つくほどの空地はあっても、チビッコ広場に恵まれない子どもたちは、野外の遊びから締め出されて、おのずから室内遊びと家庭学習に追込まれざるを得ない。祖父の時代には、輪まわしに駆け興じていた通りは、すっかり車のラッシュに占められて、信号機の点滅に頼らなければ歩けない現状である。ここに地域の実態と要望から学校教育の課題が生まれ、歴史の古さからくる諸先輩のリードとエリート意識による学力への要請は、もっと広い視野からくる健康づくりへの対決ともなって、古いわらべ唄を置き去りにして強くクローズアップされるようになった。

2. 五福の意味するもの

おそらく「五福校」の名は、校区の呉服町に因んだ名称であろう。しかし、「呉服」としないで「五福」と同音異語の校名を名づけたところから本校の伝統は始まる。書経の洪範

篇を繙くと「君たるものは、中正不偏の道徳的標準を立て、これをその身に体して五福を身にあつめ、これを広く天下の万民にわかち与えて……」とあるが、この周の武王にまつわる故事を引いて校名とした創立当時の安岡県令の慧眼には敬服の外はない。

昭和40年に創立90周年を迎えた本校では、この中正不偏の道徳的標準の確立によって招来される「五福」の悲顔を、どのように現代的時点において捉えたらよいかを考え、寿・富・康寧・修好徳・考終命の五徳を核として本校の教育目標を設定することにした。とともに、生活のめあてを作って児童の日々の生活に生かしたいと念じた。

児童生活のめあて

1. 希望にみちた 明るい子ども
2. よく考えよく働く子ども
3. からだをきたえ がんばる子ども
4. きまり正しく すなおな子ども
5. めあてを知って 助けあう子ども

この生活のめあては、いつも子どもたちの理想像として生活を豊かにし、また規正していく心の支えとなっている。学校経営の細胞組織である学年経営にも、また学級経営における実践もつねに根源をここに求めて、単なる最大公約数的な題目に終ることなく、ひとりびとりの個性に徹した手づくりの教育にまで心をくだくよう心がけている。

3. 伝統は創るもの

前述のとおり、本校区がかつて加藤清正公の熊本築城以来、熊本商店街の中心地として、いわば経済・文化の拠点であった古町時代から、ようやくにして世の推移とともに、それらの中心点は北進して衰運に傾きながらも、なお、今に至るまで物心両面にわたる老舗の貫禄を保持しつつある事実、それがやがて教育に寄する深い関心ともなって、一方にはエリート意識の高さを批判されながらも、他方には教育優先のプライドを顔として譲らない気質を形作って、今日の五福校の名声に大きなバックボーンを焼き入れている事実を見逃がすこ

とはできない。

こうした背景の上に立って、本校の教育はその時代時代の世相流動に応じながらも、一貫した五福精神をもっている。

①教職員はつねに丸となって学校教育のためにたゆまない努力を続けているし

②児童はつねに追究的な学習態度をもって高い学力水準を保っているし

③校区は一体となって学校のため物心両面にわたる協力を惜しまない
のである。

これらのことは、一応抽象的な記述に終わってしまったが、過去15代の学校長のそれぞれの世代において、つねに新しい観点の学校経営が意図され、市内はもちろん、県下の先達校としての面目が保持されていることを見逃すことはできない。

たとえば、学校医の設置が県下の嚆矢であること、九州児童オリンピックで9年間も連続優勝していること、戦後第1回の小学校教員研究集会（九州ブロック）が本校において開催され、いわゆる新教育の先鞭をつけたこと、さらに例年開催した各教科の自主的研究発表会が、今日の市内における地区研・全日研を招来していることなど。

5月、熊本城頭にはむせるような香りをただよわせて、楠若葉が初夏の強烈な太陽を全市にはじき返す。そんなとき、私たちはその若葉の美しさにだけ見とれてはいけない。亭々と伸びたその大樹の根もとにうず高い落葉が堆積されていることに気づくことであろうが、新しい芽を出すためにはそれにふさわしいだけのわくら葉をおとさなければならない。樟の大樹は、大地に固く根を張って、その本質としての幹を大空に立てながらも、落とす落葉はことごとくその幹からふるい落とすのである。でなくては新しいものは生まれて来ない——伝統は単に守るだけのものであってはならないことを私たちに教えているのである。

4. 強く優しく美しく

学校経営は、あくまでも一元的でなくてはならないし、つねに有機的に運営されねばならない。「全人教育をめざす調和的学校経営」のテーマのもとに本年度の経営を進めている意図もその辺にあるからである。約10年間、各教科別の自主的研究で地ならしを行なった本校の進路は、ようやくにしてこのような総合的・調和的な経営を進めてよい時期に到達したといった方が適切かも知れない。どの教科にも、どの領域にも陥没点があってはならないのである、ひとつひとつがそれぞれの特長を発揮したとき、学校経営は多角形の極限としての円、——調和的全人教育の域に達するものである。保健活動も、学校給食も、そして特別活動も、どの教科活動に比

べても凹凸のないレベルにあることを、私は誇りに思っている。月1回の強歩会で情操と体力の両面をねらい、子どもオリンピックで運動能力とスポーツへの関心を深めるのも、校庭の一輪の花に心を寄せ、飼育舎の小動物に生きるものの生命を感じとらせるのも、教育における価値の認識においては他のすべての教育活動と同等でなくてはならない。

昭和41年度、図らずも健康優良学校特選校に選ばれたとき、私たちはその喜びよりむしろ教育の厳しさをしみじみと味あわされた。年度の終わりに、校舎の正面に健康の塔を作って五児の塑像を描いたが、それは次の完成へのひとつの誓いでもあった。大理石の台座の正面に刻んだ「強く優しく美しく」のことは、先きに述べた児童生活の五つのめあての集約されたことばといってもよいであろう。

強歩会の折りに拾い集めた石に、じぶんの姓名も丹念に記して礎石に埋め、職員みんなで衆知を集めて選んだ「強く優しく美しく」のことは、職員児童あがての悲願がこめられているのである。そして、この悲願達成への時々刻々の生活がひとつひとつ検討されて日々の積み重ねを続けていった。私たち職員間での毎日のあいことばは「子どもと勝負する」の一語に尽きた。子どもたちの発達の段階に応じたひとりひとりへのきめ細かな手づくりの教育は、特別の出色ある経営ではなくて、全く地味なそれでいてどこにもひずみを作らない将来への素地としての基礎教育が、ことし日本一という栄誉に輝く結果となってしまったのである。

私たちは、今こそそうたおう。

五福の道は 健康への道
健康の道は 「五福」追究への道

この道は
いつも 新しいくふうをしながら
強く 優しく 美しく 育つ道

この道は
学校 家庭 地域の ひとびとが
力を尽くし 愛を傾け
全人教育をめざす道

この道を求めて 九十余年
ここ 昭和四十二年度
日本一 健康優良学校の栄冠に輝く

五福校の道は
いつまでも いつまでも
未来に続く 長い道



日本一健康優良学校へのあゆみ

香川県小豆郡内海町立苗羽小学校長

平井美直

はじめに

映画「二十四の瞳」(原作壺井 栄)で、一躍有名になった小豆島、国立公園瀬戸内海の島々の中で淡路島に次ぐ大きな島である。

高松港から1時間土庄港に上陸すると、そこにはオリーブの木とフェニックスにかこまれて、大石先生を囲む12人の子どもの清楚な「平和の群像」がある。この「二十四の瞳」に出てくる岬の学校のモデル校は本校の田ノ浦分校である。

さて土庄港からバスで40分波静かな内海湾に面した部落、そこが苗羽である。

本校は1873年(明治6年)の開校で児童数 362名、学級数 11、教員数14名の小規模であるが、長い伝統の中に新しいものを求めて今日も元気に学習を続けている。

1. なぜ健康教育にとり組んだか

(1) 地域に立脚して

本校区は気候、風土、産業に恵まれているが昭和13年～17年のころは次表の示すとおり乳児の死亡率が非常に高かった。

・乳幼児死亡率

(昭和13～17年)5か年平均

満1年未満	7.55%
満1～2才	3.56%
満2～3才	1.26%

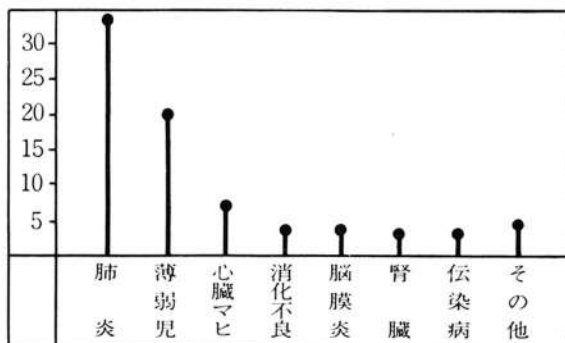
そこで当時の黒木村長、木下元義(現丸金社長) 木下元二(現内海郵便局長)木下準一(元県醤油試験場技師)を中心に全村の健康基礎調査を行ない、政府の健民運動に呼応して指導者を

高松市から迎え、母親を中心に乳幼児対策、結核対策、う歯対策を進め、一方学校では味噌汁給食を行なうと共に体育運動に重点をおいた。

昭和20年終戦当時の混乱した社会

すさみきった国民感情に落つきと愛情をとりもどすことを念じて、音楽教育を取り入れ現在に至っているが、毎年NHK全国音楽コンクールに出場し県代表、四国代表となり中央に出場を許されている。

・乳幼児死亡原因(昭和18年)



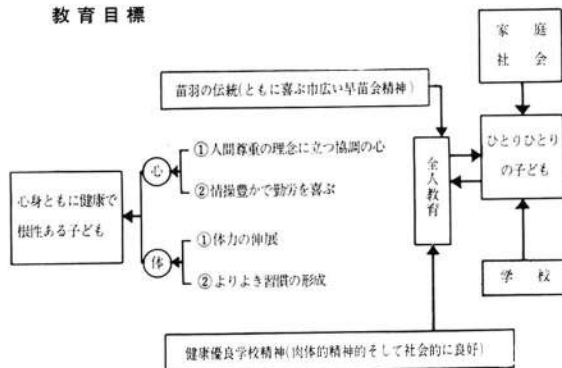
昭和36年鉄筋校舎が落成し、香川県学校保健研究中心校となり、昭和41年健康優良学校県一位となる。昭和42年健康優良学校県一位となり実地審査を受けて現在に至っている。

(2) 全人教育をめざした健康教育を

「心身ともに健康で根性ある子ども」を教育目標に、本年度は4本の柱を特に重点に考えた。

いかに立派な知識や技能、人格の持主であっても、健康でなければ社会の進歩に貢献することができない。健康こそは人間の基盤であって、いつでも、どこでも、だれでもがせねばならぬ教育である。

教育目標



1946年世界保健機関WHOにも「健康とは肉体的精神的そして社会的に良好な存在状態である」と言われているのをもみても、健康教育即全人教育である。この健康は、一朝一夕に生まれるものでもなければ学校のみでつくられるものでもない。地域ぐるみで毎日の積み上げがあってはじめて可能なものと確信する。

2. 4本の柱をどう進めたか

(1) 情操豊かで勤労を喜ぶ

音楽を楽しく正しく行なうとともに、環境緑化二次三次と順次行なう、岩盤にいでむPTAの勤労奉仕も大へんであったが、なかよし園（植物園、岩石園）は完成し、運動場の周囲と校舎前は芝生の緑とユーカリ樹、あかしや、唐しゅろ、ワシントンヤシ、フェニックス、さんご樹、たちばなもどき、かいづか等が緑を競い、花壇には四季おりおりの花が咲いている。

(2) 体力づくり

PTAの協力をえて、はん登棒、雲梯、シーソー、平均台、的あて等固定施設の増設とともに、柔軟体操、業間体操、山登りを実施する。

(3) よりよき習慣形成

基本的行動様式にもとづき「よい子の一日」を作り（・正しい手洗い・むし歯予防・便所の使い方・偏食矯正・交通安全等10項目）家庭に渡し、評価表を渡して反省しながら実行するようにした。

(4) 生きて働く学力を育てる

自発——協力——解決の学習、常に教師は

- ・教材の究明につとめ核心を押え、指導の能率と効果をはかる
- ・環境（人的、物的）を整える
- ・学習の目標をはっきりし、学習にパラエターを持ち個人差に応じた指導を
- ・よくわかる授業は興味を喚起し自主的学習の芽生えとなる
- ・毎時進歩している教師にしてはじめて教える資格があることを忘れず、実力を磨く誠の教師であること

おわりに

組織活動、保健管理、保健指導、学習等いろいろあるが、要は子どもの幸を願うものであり、自他の生命を尊重することだと思う。

教育はハッキリでも宣伝でもない。1人1人の児童をみつめて、じっくりと本道を歩む教育は地味なものである。

日本一という名をいただいたが、それは決して頂上ではない。これからが大切である。花も実もある学校にと願っている。校区民の信頼と和のもとで。



表彰式に謝辞を述べる 平井校長

片々草

★ さすが 日本一

学校経営に高度の理念があり、ゆめがあり、打って一丸となった努力の集積がうかがえる。湯浅団長のご報告と、校長先生との対話に浮彫りされている緒方君、野口さん、担任先生の深い思いやりと、行届いたご両親の愛育が、恵まれた天性を日本一の榮譽へと結晶させたのではなかろうか。

★ 「鈴木は緊張しすぎるよ」

冬季オリンピックで、期待されていたスケート 500m 鈴木選手を評した、優勝者ケラー（西独）の言である。フライング2回、8位となり「おれは終わった」と悲壮な叫びをあげた鈴木選手だけのものではなく、祖国へのおみやげとして金メダル以上大切に扱いたいことば。

下萌えや雪割る庭のそこここに

（S.O）



緒方龍というせいと

福岡市立大名小学校長

桑 野 逸 之 助

緒方君は、日本一に決定した直後、記者会見をした時、感想をきかれて

「日本一に決った時、しまったと思いました」と答えた。

記者たちはおどろいて

「どうしてかね」と尋ねた。緒方君は

「日本一になったら、ヨーロッパへ行くことになると思いますが、私は大学の付属中学を受験します。期日がかさなって受験がだめになるのではないかと思ったからです」と答えている。

緒方君は、将来医者になろうと思っている。彼にとって、この一つの志に支障をきたすものであったら、日本一という栄誉も困ったものに感じられたのであろう。

東京での審査について彼は、体力テストの懸垂が悪いからだめでしょうか、学力テストで算数の問題が何ページもあって、しとおせない程でしたとかを話した。

それから15人の審査委員の一人一人の前に出て、いろいろなことをきかれたり、数人がグループになってそのグループで何かをさせられて観察されたらしい。

新聞社の人の話では、審査員の人たちは、特選10人の中から日本一を選ぶのに陰から一人一人の行動を見られたらしいですよと話してくれた。

体格や体力等は、書類審査でだいたいわかっているが、一千万の日本の小学生の代表として親善のやくめを果たし得る少年使節としての教養、態度を身につけているかを選択するのだから、かなり審査は手間だったらしい。

もちろん、関係者以外は、審査風景はのぞくことさえできなかった。

緒方君は 正月3日にヨーロッパへ立って、学校には1月16日帰ってきた。

朝の会で、帰国の報告会を、私が全校児童や職員の前で、彼に質問するかたちで行なった。

濃紺の背広に赤のちょうネクタイで立った彼は、「これが

ローマ法王におあいした時の姿です。みんなに見ていただくために着てきました」と話した。

以下は私の質問に答えた中の一部である。

——途中の飛行機は快的でしたか——

「いえ、北極まわりで、飛び立って3～4時間たった頃からみんな酔いました」

——窓から見える景色は——

「上から見ると、どこの国も美しく見えました。帰りにオーロラを見ました。めったに見ることができないとききました」

——パリーの印象は——

「町が美しいことです。ごみがありません。それに、小学生や中学生が道や公園に出ている姿を見かけませんでした。きくと、ちゃんと家にいて、めったに外に出るいたりしないそうです」

——学校を見ての感想は——

「作文を訳してもらったり、算数の学習を通訳してもらったりしながら思ったのですが、勉強の程度は、僕たちと同じで、いや僕たちの方が上かも知れません。でも、マナーはりっぱだと思いました。

例えば、廊下で後から僕たちの横を通りすぎる時には、失礼しますという意味のことは自然に言って通ります。

また、先生の手先の動きだけで一斉に皆きちんと立ったりします」

——がい旋門を見た感じは——

「学校の勉強で思っていたのより段ちがいにでっかい」

——ローマ法王におあいした時の印象は——

「半年ほど御病気で面会はほとんどできなかったのに、僕たちのために会ってくださいました。

『世界の平和のためにおつくしください』

という意味のことは申しあげました。

ローマ法王は、日本の国は平和のため、たいせつな役目を果たす地位の国ですといわれました」

私は緒方君をつれて、帰国のあいさつのため関係方面に行

ったが、その帰り道、彼は私と肩をならべて歩きながらポツリといった。

「校長先生、やはり日本はいい国です。どこでも飲める水があります。そして、自由です」

短期間であったが日本を外から眺めてみて、彼にとって、水と自由とが日本の何かを象徴しているのであろう。

まもなく、放課後寒風の中に緒方君が、大ぜいの仲間といっしょに、学校の運動場をボールを持って走り回っている姿が見られた。



古賀 一公

日本一健康優良児を担任して

緒方君が日本一になってから「日本一の健康優良児をどのようにして育てたのか」という質問をたびたび受けました。そのたびに私は「緒方君を育てたのは家庭の方や緒方君自身です。私は別に何もしていません」と答えてきました。それは謙遜でもなんでもありません。事実私がしたのは、全国審査に出ることがきまった時「けん垂が弱いからけいこしとけよ」と言っただけのことです。

もともと私は、どちらかといえば優秀な子よりも、できの悪い子の方に興味を持ちやすいほうですから、緒方君が日本一になったらいいなどとは考えてもみませんでした。それよりむしろ「もしも日本一になったら、緒方君にとって大変な負担になるだろうな」という心配のほうがあったくらいです。

ですから「日本一をどう育てたか」ということについては何も述べることはありません。しかしこの機会に「健康教育」という面から一つだけ述べたいことがあります。それは「精神の健康とスター意識」ということです。

緒方君は、日本一になる前から学校でもスター的存在でした。体格がズバぬけて大きいうえに、学習でもスポーツでも

たいへん優れた成績ですから、友だちから自然「別格」の存在として認められており、何かあると、いつも一番に代表に選ばれてきました。学校児童会委員長になったのもその現われの一つです。

こんな立場に立つとどうしてもスター意識が育ちやすいものですが、その緒方君が次のようなことを書いたことがあります。

「ぼくは普通の友だちと同じ目で見られたい。自分というとおかしいが、ぼくは少し頭がいい。だから特別なこと（たとえば学級委員選挙）があると、人から『学級委員になっただろう』と言われる。しかしぼくはそう言われたくない。ほかの人よりぼくが特別に頭がいいなどということはないと思う。だからぼくを特別な目で見えてほしくない」

スター意識が育つと、それは無意識の層にはいりこんで将来いろいろな心理的葛藤を起こし、精神の健康をそこなうおそれがあります。常に自分が人よりすぐれ、人に注目されていないと不満を感じます。ですからいつのまにか人と競争し、勝とうとしています。人が賞められると心おだやかではいられません。普通に待遇されたのでは、まわりの人は自分を正しく理解していないのだと感じ、不満です。また、失敗を恐れ、思い切って自分の全力で物事にぶつかることが難しくなることもあります。

うまくいけば、そんな自分の心を見つめて深い人生観に達することにも役立ちますが、へたをすると家庭や職場での人間関係の適応に失敗して不幸な人生を送ることにもなりかねません。「健康教育」はこんな意味からも「精神の健康」にもっと力を入れなければならないのではないのでしょうか。

緒方君は日本一になる前からスター意識の育ちやすい状況におかれていたわけです。ところが今は「日本一」という大変なスターになってしまったのだから、今までとは比べものにならない大きな困難な状況にぶつかっているわけです。

しかし緒方君は前の作文にもあらわれているように、このことにもう気づきはじめていますから、きっとこの大きな困難をのりこえて、精神的にもますますたくましく成長していくことと思います。

「日本一」の緒方君だって、やはり欠点をたくさん持ったあたりまえの人間です。これから緒方君は「あたりまえの自分」と「日本一の自分」との心理的な葛藤にぶつかると思います。そんな時こそ、まわりのものはその悩みをよく理解し、ありのままの緒方君の姿を暖かく受け入れてやり、緒方君の「精神の健康」がさらに伸びるように援助してほしいと願います。



龍が日本一になって

母

緒方三重子

健康優良児日本一に我が子を選ばれるなど、夢にも思ってみませんでしたので、それだけに発表された時は、今更のように我が子を見直したものです。

このように立派に育ちましたのも校長先生、担任の先生、養護の先生、外諸先生の御指導と御協力の賜と深く感謝しております。

幼い頃から素直な明るい子でした。幼稚園に通うようになって、よくお友達と遊び親しまれ、小学校に入学してからは、兄と一諸にソフトボールをしたり勉強も人に負けないよう頑張る方でしたが、性格的にのんびりしたところもあり、上学年の今では、勉強にもう少し力の入れかたが足りないと思われるようです。

日本一となった現在、育児について考えてみると、別段特別に今日を考えて育児に専念した訳ではなく、普通のご家庭と同様ではなかったかと思います。幼児の頃は、へんとう腺をはらし、高熱を出して、けいれんを起こした事もありましたが、幸い家には経験豊かな祖母がおりますので、具合がおかしい時など早めに病院に行くなど、大へん助かりました。

その他できるだけ、へん食をしないよう心掛けたり、冬でも無理のない程度にうす着を励行した事が、丈夫な身体を育成した事に影響があったのではないかと思います。

学校では、担任の古賀先生の教育方針で、自己反省のできる強い人間になるよう教えられ、家庭でも、それが人の和合に自然にとけ込めるようになり、校長先生の「小学生としての現在を充実できるような子供になることが大切だ」との教えが身につき、日本一の栄冠を得たものと思います。

今後も兄とともに仲良く、積極的に何事でもやりぬける意志の強い人間であるよう、また思いやりのある優しい人間に成長してくれるよう願っております。

ママの質問箱

河合製菓が、日曜を除く毎日朝の婦人の時間に、民間6局から放送のラジオ番組です。

総合愛育研究所指導部長 松島富之助博士が病氣について、お茶の水女子大学家政学部教授平井信義博士が教育やしつけについて、それぞれ適切なご指導をいただき、全国各地から感謝と好評を博していますので、ご参考にもと収載いたします。

子供らしくない子供

○兵庫県の一主婦

小学一年生の女の子ですが、成績は非常によく、特に算数に優れており、先生も知識は申し分ないといわれます。

ところが個人個人の話のときに、子供らしさがなく、自分の感情を外に出さないということなのです。私が勉強勉強と押しつけるのが負担となっていて、こんなことになったのでしょうか。おもしろいテレビを見ても笑いが少ないように思われます。

私は自分の教育について反省しているのですが、この子について、どのようにしたらよいかお教え下さい。

△平井先生のお答え

みんながおもしろいときにも笑わない、こういうお子さんは集団の中で、自分を発言する機会が養われていないのです。その大きな原因は、友達との関係が発達していない、おそらく小さいときから、友達が家にきたり、友達の家へ行ったりして、どんどん喧嘩をしたり、楽しく遊びながら過ごすことが少ないのではないのでしょうか。このような家庭のお母さんは、とにかく、よそへ行ったら、こうするんですよ、という教えが多いのです。で自分でも、こういうことが圧力になっているという心配があるのではないのでしょうか。

サテ、どうしたらいいかというと、子供を一度、思いきってあばれさせ、発散させるんです。そうして、自分を表現することを身につけるようにすると、あかるくなります。



健康優良児日本一

野口美佐子

群馬県太田市立太田小学校長

広 田 良

1. 日本一健康優良児，野口美佐子の育った周辺について

本校は，群馬県の東南端，太田市の中心の地区，旧太田町のほとんどを学区にもっており，典型的には一部住宅街をふくむ商業市街地といえよう。

本市は，首都圏整備地域に指定されて，最近目覚ましい発展をしており，周辺の農林地帯も急速に都市化の形態をととのえつつあるという状況である。その中で，本校は，いわゆる旧市街地の中心地区を，その学校区にもっているといえよう。

学区の北側には，関東山塊に属する標高220m級の金山(かなやま)がとなり立っていて，学校のすぐ北側には高山神社があり，ここには寛政の三奇人の一人である高山彦九郎先生が奉祀されている。

なお金山のふもとには，子育呑龍で名高い大光院があり，頂上には，新田義貞公を祀る新田神社の社殿がある。本校の秋の遠足は全校揃ってこの金山をコースに選んでおり，自然と調和している地方都市という点では，極めて恵まれた地域であるといえよう。

学区は一般に，教育に対していわゆる関心度がたかく，学校の教育方針には極めて協力的である。児童の素質は一般的にすぐれているといつてよいし，知能もたかく，学校環境としては，教育的に一応のととのいをみせているといえよう。児童の身体的な特色としてあげられるものは，一般的に体位の向上がみられるが，体力という点で欠けているものがあり，ねばり強さとか，逞ましさにいて不足しているもののようである。

2. 日本一に選ばれたことの要因について

本校の野口美佐子が，日本一に選ばれたことについてはいろいろの要因が考えられるが

- (1) 家庭の環境と本人の素質がすぐれていたということ
- (2) 学校の教育実体の中に，その要因の一部があったと

われるし，さらに担任教諭，養護教諭の努力も加わっていたと考えられること

- (3) 本校職員並びに，学校医等の協力も大きい影響をもっていると考えられること

- (4) 本人の自覚した努力も絶対に無視できないこと

このような諸条件が相互に関係しあつて，このたびの榮譽をもたらすことができたものと考えられる。

さて，そこで

3. 家庭の環境と本人の素質について

本人の家庭は，酒類等販売業を営んでおり，町の大通りに面しているが，本人の幼時におけるだいたいの生長の過程は，主として祖父の家ですごしたもののようである。

祖父母ともに教職にあつて，叔父叔母にも教育関係者の多い教員一家に生長している。

しかも，祖父，叔父ともども，いずれも体育指導にすぐれた技術をもっている家庭で，いわば生まれながらにして，健康優良児に選ばれるにふさわしい環境におかれていたと思われるのである。現に祖父にあたる野口良作氏は，本市宝泉小学校長の職にあり，体育指導の研究では，本県において，最もすぐれた実績をもつ学校として自他ともに許しているという状況である。

その上，本人は生まれながらにして健康な素質をもち，すでに一歳のとき，群馬県のあかちゃんコンクールにおいて，準県一に選ばれたという実績がある。その後，小学校に入るようになってからも，極めて順調に成長しており，6年前の新入学の身体検査のころから，学校内では，健康優良児との合言葉があつたほどである。

本人が三年に進級したころであつたらうか

「四年後の健康優良児をめざして，家庭でもその腹づもりで育ててほしい」と，学校長の意見として家庭に要請をしたほどであつた。

ともあれ，家庭環境と，本人の生まれながらの素質，加えて本人をめぐる周辺が，幼時すでに健康優良児への可能性を意識していたことは事実である。

4. 学校の教育実体と、担任教諭や養護教諭の努力について

本校児童の身体状況は、全国的な傾向でもあるが、ともすれば体位においてすぐれていながら、体力においてやや欠けているところがみられる。そこで、本校の教育方針の中には「体力の充実を期する」ための項をうたって、単に、体育指導の場のみでなく、そのための諸条件をととのえるために、精一杯の努力を重ねてきたといえよう。すなわち、子供の日常の生活の場を、体力充実の場たらしめるために、最大の工夫をこらしてきたのであるが、さらに、学校給食の充実という点でも、他校に先んじて、きりこみをふかく研究してきているといえよう。

このような学校の方針にそって、担任教諭や養護教諭も、実に精力的な実践をつみかさねてきているのである。

いまの養護教諭が、本校に転任してきたのは、今から四年前のことであるが、その時すでに、学校長から野口美佐子の家庭に警告してきたと同様の指導の心構えを伝えたほどであった。この点、こんにちまで、実によく力をつくしてきており、それ以来学校医のところへは、適時随時に通わせて、本人の生活上の注意を要請したり、治療すべきものは完全に治療させるという努力を重ねたのである。

本人が県一になり、さらに特選になり、日本一になったことを知るや、学校側がまず第一にその吉報を報告したのは、学校医に対してであったことをもってしても、このような事情を裏づけるに足る一つの要素であるといえよう。

5. 本人の自覚した努力について

学校側の要請もあってか、家庭でもこのことのために異常の努力を重ねたもののようである。五年生に進級のころから懸垂力をつけるために、畳の上で、腕立伏臥を何十回となく鍛練したときいているし、学校の裏の高山神社に参詣するための高い階段を、本人の体をきたえる場所として選んだのも、そのころからであったときいている。今年の夏休みなどは、祖父や叔父がいっしょになって走るちからの充実をはかったようである。

鍛練のはじめのころは、懸垂力が、僅か8秒程度であったものが、テスト当日には、29秒にまで伸張している事実をのべて、祖父である宝泉小学校の校長は、「きたえる」ことの重要性和可能性とを、しみじみとして語っておられたほどである。

次の一文は、東京での表彰式の直後に、本市の市長、さらに教育委員会、学校保健会から表彰をされた際の、本人の答辞の中のひとこまでであるが、これをもってしても、本人の努

力が、このたびの榮譽の重大な要因をなしていたことが考えられるのである。

その答辞の一節は、

『市、県の代表、特選、日本一、一步一步のぼりつめたこの道は、長く苦しいものでした。

「代表としてはずかしくないようがんばろう」

こう心にきめてはじまった練習は、父と祖父のあたたかい励ましと、いっしょに走り投げる熱心な指導をささえに続けられました。

県の審査会で、もっている自分の力を発揮できたとき、ふだんの練習のつまかさねによって、やればできるという大きな自信をもつことができました。しかし、それからの毎日、なお一層きびしくつらい練習をしました。

ボール投げのフォーム、走り幅とびのふみきりと、泣きながら練習をつづけたこともたびたびでした。東京でのテストでは、クラスの皆さん、そして、「今までやってきたことを自信をもってやりなさい」という父のことばを心にきざんががんばりました。女子日本一 野口美佐子——。うれしさと責任をはたした喜びで、ジーンと胸があつくなり、涙をおさえることができませんでした。

三日の表彰式のあと、両陛下にお会いして、「立派な社会人になるように」とお言葉をいただいた感激は、きびしかった練習とともに忘れることのできない思い出として残ることでしょう。私は今、しあわせです。このしあわせをかみしめながら、私はこれからも、自分の目ざした道を元気にすすんでいきたいと思います』と。

さて、私はここまで記してきて、ともすれば身体方面だけを問題にしてきたようであるが、ここでは僅かながら、本人の性格、性行等についてのべるべきであろうか。

実は本人が特選になったという連絡があった時、私の立場で、最初に思いあたったことは次のことであつたのである。

すなわち、このことが、すでに六年生という発達段階にある、ほかの女子児童に「羨望」というようなかたちでむかえられるようであると、その後の本人への教育指導上、細心の注意を払うべきであると考えたのである。

しかし、実状は、そうしたことが全くのきゆう（杞憂）であつたのである。

すなわち10月30日、全国的な段階でのテストを受けるため、上京の際などには、子供達の発議によって、正門まで、学年をあげて見送りをし、かつ激励をするというふうであつたのである。しかも、ここから野口美佐子の榮譽をたたえ、それはそのまま、みづからの喜びでもあるというふうであつたのである。

考えてみると、これは本人のすぐれた性格、さらには人からというものがそうさせたものであろうか。

全日本健康優良学校児童審査会からいただいた表彰状の中に、「心身ともに健康な」とうたっている実質が、まさに本人のすべてを物語っているものと思われるのである。

6. 終りにあたって

考えてみると、このたびの栄誉は、日本一健康優良児野口美佐子をめぐる広範な諸条件が、相互にからみあって、相乗的にその成果を生み出したものと思われるが、わけでも、家庭や学校、さらに広い意味での郷土社会がその要因をつくりなしたといつてよいと思われる。

思えば、この月には、本人は中学校への進学が準備されている時でもある。発達段階からすれば、すくなくとも、こんにち以後のそれは、本人自身の自覚とちからとが、本人の将来を決定するものと考えるのである。この輝かしい栄誉にこたえるものは、まさに本人のこんにち以後における生活のしかたにかんにかかっているものと思われるのである。

こうしたことから、本校で発行している学校新聞に、日本一健康優良児についての特集の中で、私は「野口さんによせる」という見出しで、次の一文をかいたのであるが、それをそのままここに記して、本稿の結語としたい。

「野口さんによせる。」

「日本一おめでとう」日本一健康優良児童として表彰された野口さん、おめでとう。

11月3日、文化の日に、朝日新聞本社の講堂で、表彰式があり、あなたが広岡社長さんから、表彰状をいただいたそのとき、「日本一」ということばの重みを、しみじみとかみしめたのは、恐らく私ひとりではなかったと思います。

それにしても、野口さんが、六年生であるという現在の境遇からすれば、この輝かしい栄誉は、主としてお家の方々や、あなたをとりまく人々のちからによって結晶されたものと思います。

しかし、すくなくとも、こんにち以後において、この栄誉にこたえるための答案は、野口さん自身のちからによって、書き加えられ、そしてきりひらかれるべきものと考えます。野口さん以外には、この栄誉にみあうだけの将来をきりひらいていく主体者はいないはずです。

その点では、私はあなたには、そのちからがそなわっているものと信じています。

表彰状の中にも、「自分自身の努力も加わって」と書かれてあったはずですが。

みずからの運命をきりひらいていくもの、それは、自分以外のなにものでもないのです。

頑張ってください。(完)



美佐子を育てて
母 野口光江

美佐子が健康優良児日本一になれるとは考えてもみませんでした。生まれた時の体重は3.26kgの普通の赤ちゃんでしたが、大きな声で良く泣く元気な子でした。保健所の乳幼児検診日には必ず行き、健康診断、育児、栄養等を指導していただきました。家がお店を営んでいるため主人が配達に出かける時に美佐子を背負って配達をした事もたびたびでした。

家がこのような状態の中で美佐子が弱かったりしたら、それこそ大変だったろうと思います。幸いに生まれた時から元気な子で、病気らしい病気は一度もした事もなく、離乳が早かったので偏食をしないよう、食べやすいようにと工夫し、どんな物でも食べられるようにいたしました。生後1年、群馬県ベビーコンクール審査会で第2位に入選する事ができ一層養育に注意し、健康で明るく、素直な子供になるようにと、願い続けてまいりました。他のお友達より大きく、いつもお友達より首だけ上が出ていました。女の子であり大きくなってはと思ったほどです。お店が急がしいのでなかなか子供について見てやれず、まして、一人っ子なので、甘えたり、人に頼ったりするのではないかと心配でしたが、自分から進んで何んでもてきぱきと物事を片づける事ができ、4年生ころからは、お使いはもちろんのこと、お得意さんへの配達もさせてまいりました。

「健康優良児日本一野口美佐子」朝日新聞社の講堂で表彰をしていただき、堂々と謝辞を読む美佐子の姿に、心から「良くやりましたね」と、感激の涙を流しました。

この喜びのかげには、大勢の先生方のみなみならぬご指導があったからこそ、この名誉が得られたものと感謝しております。美佐子にとって6年生の夏休みから始まった練習は辛かったろうと思っています。一日も欠さず、学校か

ら帰るとすぐ主人と二人で練習に行く姿はきびしいものでした。ランニング、走り幅とび、けんすい、ボール投げ等々のトレーニング、はた日にも涙のこぼれる思いでしたが、心を



健康優良学校を育てたい

島根県八束郡出雲町立揖屋小学校長

佐野 賢之助

暑い夏を過ぎて長い休みが終るころから毎年健康優良学校の実地審査が始まる。今年もすでに早いところは審査を受けてしまった学校もあろうかと思う。

全国数多い応募校の中から選び出された学校が厳密な学校評価を下される理であるが、ここまで到達することが並たいていなことではないのである。

21項目の内容を学校教育のすべてにおいておさえ、その成果を現実の子どもの姿に求めることは容易な仕事ではない。が、それを成し遂げる過程において教師の指導力が高められ、子どもの自主的な実践力が充実し、PTAの保健活動が向上することによって、すべての子どもが健康優良児に育成される基盤が培われるならばまことによい学校教育の推進であると思う。

■ 行政5か年を顧みる

昭和37年4月、島根県の教育委員会保健体育課に席をおき保健係長と指導主事を兼任した。当時は最も本県の健康優良学校に対する認識が低く関心も薄かった頃であったろう。いわゆる批判期であったかも知れない。いつの世でも、栄枯盛衰はつきものである。制度創設以来の飛躍的な発展の反動期であったことに違いはない。

しかし、もともと私は健康優良学校を見捨ててはいなかった。心の一角に根強く残っていたことは事実である。

学校保健行政の重点を一つは健康優良学校という頂点から下におろすのと、二つにはすべての学校の保健の充実伸展を求めるという二面作戦を考えたのである。

過去本県からは、日本一2校、準日本一2校、特選校5校がつくられていた。いわば全国的には名門県である。初期にはこれが普及のために裨益したことはまことに大きいものがあったように思う。

鬼にして、母親としてはこころ根性作りと思い、甘くしませんでした。これから先は、きたえた根性と、体をもとにして、日本一が重荷にならないよう、ますます健康で明るく素直な人間になってほしいと祈っております。

37・38年と復興に力を入れた。39年になって出雲市の高浜小学校が健康と道徳による子どもづくりの主題のもとに小規模における日本一となったことはまことに大きな収穫であった。続いて40年松江市立雄賀小学校が本県多年の願望であった大規模校における日本一の栄誉を獲得するにいたって、健康優良学校への関心がとみに高まったことは事実である。各地区の学校保健会の活動も計画的に実のある活発な動きが深まってきた。県の保健教育研究連盟という新しい組織も確立され全国的な組織のもとに位置づけられて、いよいよ優良学校にとり組む気運は高まって来たのである。

42年4月、5か年にわたる行政職から現場に帰った私は、今度は自らの手でこの健康優良学校を育てたいと念願し思索をねっているこの頃である。

校長の方向づけによって学校の教育はどのような進み方をするものか、まことにおそろしいような気がする。ひとりひとりの子どもを健康に育てようとする教育の目標はどこの学校にても一応は考えられているようであるが、その実践面における力の入れ方、工夫の仕方、評価の仕方が違うのである。

地域的に、経済的に、文化的に恵まれていない本県の現状からみて、効果を挙げる学校教育の推進を学校保健委員会の活動の中核とした進み方をするのもよい一つの方法だと思っている。総合的な計画のもとに現実や将来の課題を解決して、たくましい体や美しい心をもった国民を育成する道を求めて止まない。そのためには、高い視点からひとりひとりの子どもをよく見つめ、日々行なう指導の視点をあやまりのないようにおさえなければならぬと思っている。

本県の健康優良学校を育てようとする軌道は敷かれている。県一の優良学校になることが極めて難しい現状である。願わくば県下のすべての学校がこれと取り組み、りっぱな国民を育成する基盤をしっかりと築いて欲しいものである。

■ ビリッコの子どもも堂々と

11月10日、水曜日、2、3日降ったりやんだりの山陰らしいぐずついた天候も、漸く晴れがちのこの日は、日本一稚賀小学校の表彰祝賀式の日であった。

私はW教育長を案内して会場に行った。すでに市や校下の知名の方々が、また、PTAの人々が、旧職員の校長さんや先生達が、本当にたくさん集まっておられた。皆嬉しさいっぱいという喜び溢れた顔である。こうなると、どんなにかこの日本一のために協力した県の保健係長など全く路傍の小さな石ころにもひとしい存在である。

会場の講堂には日の丸や朝日の旗がいっばいに吊られ、壁には百数十通の祝電、子どもの日本一感激の詩など奥ゆかしい講堂が今日の晴れの舞台としては十分な演出効果である。

中島校長の経過報告も、ねが国語人だけに1時間位の長い時間をあきさせず、来会者の心をピシッとひっ捕えて離さない感激のあいさつであった。

祝辞に移って五番目、それがK支局長である。彼は元来その身の紳士である。仕事が切れて部下の信望も篤かった。そのK氏が赴任初の会合で、朝日の記者はだれもが一度は健康優良学校・児童と夏の甲子園野球の二つは経験しなければ一人前の朝日の記者になれないと優良校と児童に対する関心の深さを持っているぞ、というあいさつをされたことがある。だからこのことについては随分お世話にもなった。

静かな声である。マイクを通して漸く会場の隅々に届く最小限必要な声量である。

「日本一」という三字は、いともみやすく書けもし言われもする。しかし、この三字の裏にはたくさんの人々のなみなみならない苦心や努力がかくされているのである。今日までずいぶん長い間の努力ははかり知れないものがあつたろう。校長先生の考えがすべての先生の中に、また千数百名の子どものひとりひとりの心の中に生かされていた。教員のサラリーマン化がいわれるような中で、本校の先生方は本当に子どものためによく努力されてきた。

あの集団学習の際に2年生の小さなビリッコの子どもが、堂々と大手を振って足をあわせて、しっかりと土地を踏みしめて歩いて行った姿はわすれることができないが、このように最後のひとりまで徹底させられた先生方の苦心こそ、本当に本校の教育目標が地についていることをまざまと見せられた思いで感慨無量であった。

というような意味をしみじみと述べられた。実際ビリッコの子どもまで私は見ていなかったのである。K支局長のするどい見方に心から敬服したのであったが、この目のつけどころは今も私の心の中に生き生きと生きている。

■ 実践力ある養護教諭

丘陵の上に建つしょうやかな平屋建、美しい小規模校の学校がT先生の勤め先きである。半農半漁、その他のように校下の家庭は余り経済的には豊かではないように聞いている。

この地方には眼疾、寄生虫などが根強く残っているようであり、T先生も赴任すると当然職務がこれらの保健管理や指導をとりあげた。過去5か年間の疾病対策に払われた研究と努力の賜はT先生がまとめた研究物によってよく知ることができる。

T先生は年間計画を立てて対策の強化をはかった。もちろん、全家庭の訪問もやっていた。知己の校長は健康優良学校と取り組んだ。社会教育の権威であった校長は、地域ぐるみの健康教育の推進にはうってつけである。

やがては優秀な優良学校としておめえする日が割合い早いかもしれない。

K校・U校・S校と都市の有名校を歩いたO養護教諭は十数年の教員生活で今や最高の喜びにひたろうとしている。本県で初の大任表彰を受けるよう推せんされているからである。K校・U校で鍛えられたといえ、あるいは当然かもしれないが、その働きは一貫したものであり、S校をして健康優良校に育てた原動力は高く買っようように思う。

その信念と協調性、指導力と実践力は現在を生んだ誘因ともいえよう。この裏には同じ教師の夫君の理解と愛情があったことは見逃してはならない。やはり教師が心を打ちこんで子どものために努力するためには家庭の安定が基本的な条件であることはいままでもない。

健康優良学校を育てるには、その学校に中核的な原動力となる先生が必要である。養護教諭であつてよし、一般教師でよし、校長でもよい。そしてこれらがやがて全職員の共同理解に進むことによって本格的な教育が定着するようになろう。しかし、勤務時間8時間制が私達の目の前に大手を広げている。これをどのように解決するかが、学校経営上の課題として残されよう。

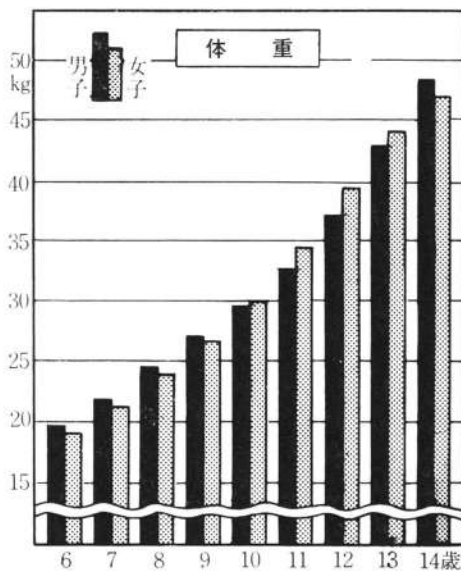
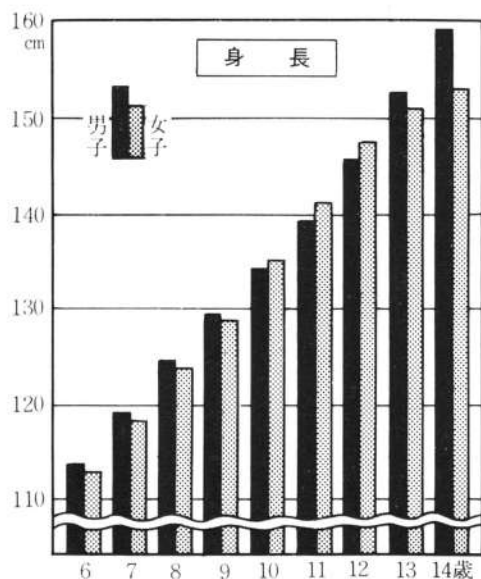
■ 底辺は広がった

今年県一を惜しくも逃したI校のY校長もその道の権威者であり、その生涯は健康な子どもづくりに捧げられたといつてよからう。

恵まれない環境を毎日毎日先生方と一緒に頑張ってペンキ塗りや大工仕事、まことに容易なことではない。こうしたところに三字の裏にひそむ崇高な価値があるのである。

本県における健康優良学校の底辺は広がってきた。それだけ子どもたちにとってはありがたいことである。すべての子どもを健康優良児に育てようとする優良学校づくりは再び興隆の時期を迎えている。どうか本質的な経営が行なわれて再び反省期を繰り返さないような営みを切に願ってやまないものである。

男女の体位比較 (文部統計速報による。昭和42年度)



“ママの質問箱”

- ★愛育研究所保健指導部長
医学博士 松島富之助先生
- ★お茶の水女子大学教授
医学博士 平井信義先生

これは河合製薬提供のラジオ番組で、毎日毎日お家庭のお母さん方が、心をいためるお子さんの病気や教育、あるいはしつけなどについて、左記の両先生が親切にお答えくださいます。ご利用ください。

【各局の放送時間】

(但除日曜)
ニッポン放送 毎日 9時15分から (東京)
九州朝日放送 9時25分から (北九州)
ラジオ大阪放送 11時35分から (大阪)
東海ラジオ放送 9時45分から (名古屋)
ラジオ中国 9時25分から (広島)
東北放送 10時10分から (仙台)

学童の健康づくりに！

品質本位の保健栄養剤

カワイ肝油ドロップ3号

1粒中 { V A 3,000国際単位
V D₂ 300国際単位

カワイ肝油ドロップB

1粒中 { V A 2,000国際単位
V D₂ 200国際単位
V B₁(セチル硫酸塩) 2.75mg



製造発売元 河合製薬株式会社

カワイ肝油ドロップC

1粒中 { V A 3,000国際単位
V D₂ 300国際単位
V C 20mg

給食強化剤

アドリッチ

1g中 { V A 50,000国際単位
V D₂ 5,000国際単位

東京都中野区新井2丁目51-8